

ビワ生育情報

千葉県
平成21年7月号

最近1年間の気象及びビワの生育状況

平成20年7月から平成21年6月までの月別気象は表1に示した。月平均気温は平成20年8、9、11月及び21年6月を除く全ての月で平年を上回った。この1年間の平均気温は15.9で平年より0.3、前年より0.7高かった。

本年産のビワの生育状況を振り返ると、平成20年の梅雨明けは7月19日で平年より1日早かったが、梅雨明け後、夏の間気温が平年より高かったため、花房の着生率は平年より高く、花房の出蕾も早かった。関東に接近した台風は1個あったが、ビワ樹にはさしたる被害はなかった。冬の訪れは遅かったため、開花の進みは平年より1週間程度早かった。冬は厳しい寒さがほとんどなく(最低気温 - 3 以下の日が0日)、寒害の被害は平年より少なかった。春先は天候に恵まれ、果実の生育は平年よりやや早まった。5、6月の天候は平年より日照時間が少なく、降水量は多かったが、3～5月の気温が高かったため、果実の肥大は早く、収穫期も平年より早かった。

表1 平成20年7月～平成21年6月の気象 (暖地園芸研究所)

年 月	気 温()			降水量(mm)			日照時間(時間)			
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年	
H20	7	24.7	24.3	22.8	16	190	386	206	175	97
	8	25.8	25.9	26.6	79	161	7	187	220	*
	9	22.7	23.0	23.4	190	250	287	(122)	(110)	(159)
	10	18.3	18.0	17.7	242	249	216	133	146	137
	11	12.8	13.3	12.6	147	154	58	130	144	140
	12	9.4	8.6	8.8	135	81	114	180	166	179
H21	1	6.7	6.0	5.1	119	94	44	121	169	121
	2	7.7	6.3	4.7	66	91	67	126	151	203
	3	9.3	9.1	10.1	174	185	144	162	154	195
	4	14.3	13.9	13.6	145	174	274	209	166	153
	5	18.5	17.8	17.2	192	178	272	165	186	147
	6	20.6	20.9	19.6	248	237	433	105	135	104
平均/計		15.9	15.6	15.2	1,753	2,044	2,302	1,854	1,949	*
								(1,789)	(1,839)	(1,763)

平年：1968～2008年の平均

*：欠測値

8月の()内数字：第1～第3半旬までの合計

計の()内数字：8月の()内数字との合計

本年度産果実の特徴

1. 熟 期

収穫期は表2に示した。暖地園芸研究所における収穫始期、盛期及び終期はそれぞれ、「楠」が5月24日、28日、6月1日、「大房」が5月28日、6月2日、6日、「田中」が6月6日、10日、16日で、いずれの品種も平年より6～7日早かった。本年の収穫はいずれの品種も平年より早く始まり、早く終了した。

表2 収 穫 期 (暖地園芸研究所)

品 種	収穫始期(月・日)			収穫盛期			収穫終期		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	5.24	5.30	6. 2	5.28	6. 3	6. 6	6. 1	6. 8	6.10
大 房	5.28	6. 3	6. 7	6. 2	6. 8	6.11	6. 6	6.12	6.15
田 中	6. 6	6.12	6.15	6.10	6.17	6.18	6.16	6.22	6.23

平年：1983～2008年の平均

2. 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさは表3に示した。果重は「楠」が56g、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ83g、78gであった。いずれの品種も平年を5%程度上回った。

横径は「楠」が4.6cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.3cm、5.1cmであった。いずれの品種も平年と同じか上回った。縦径は「楠」が4.9cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるといずれも5.5cmであった。いずれの品種も平年と同じか上回った。

果形指数は「楠」が0.93、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.97、0.93であった。「楠」及び「大房」は平年を下回ったが、「田中」は平年を上回った。「田中」は平年よりやや丸味を帯びた果形であった。

本年の着花房率は平年より高かったが、一部では寒害の被害がみられた。暖地園芸研究所の収穫量は平年並であった。

3. 糖度及び酸度

糖度及び酸度は表3に示した。糖度は「楠」が12.6%、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ10.5%、11.1%であった。「楠」及び「田中」は平年より高かった。

酸度は「楠」が0.10、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.14、0.22で、いずれの品種も平年より低かった。

4. 食味

果実硬度及び糖酸比は表3に示した。果実硬度は「楠」が0.53、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるといずれも0.54であった。いずれの品種も平年と同じか低かった。

糖酸比は「楠」が平年より68ポイント、「大房」(3地区の平均)が21ポイント、「田中」(3地区の平均)が16ポイント高かった。

いずれの品種も平年に比べ果肉が軟らかく、糖度(「大房」を除き)が高く、酸度が低く、食味は良好であった。

5. 病害虫の発生

本年はカメムシの捕獲頭数が平年より多く、産地でのカメムシの発生量、吸汁被害は平年より多かった。クワゴマダラヒトリの食害は平年並みであった。また、そばかす、裂果、紫斑、日焼け、たんそ病等の障害果の発生は平年並であった。

表3 果実の大きさ及び品質

品種	調査地	果重(g)		横径(cm)		縦径(cm)		果形指数		糖度(%)		酸度(g)		硬度(kg)		糖酸比	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
楠	暖地園研	56	53	4.6	4.5	4.9	4.8	0.93	0.95	12.6	11.8	0.10	0.19	0.53	0.53	131	63
	青木	78	82	5.2	5.4	5.3	5.4	0.99	0.99	10.7	10.3	0.13	0.16	0.54	0.58	81	65
	南無谷	78	77	5.2	5.2	5.4	5.3	0.96	0.98	10.8	10.4	0.10	0.19	0.54	0.57	105	54
大房	暖地園研	92	79	5.5	5.3	5.7	5.4	0.97	0.97	10.1	11.1	0.19	0.20	0.55	0.58	53	55
	平均	83	79	5.3	5.3	5.5	5.4	0.97	0.98	10.5	10.6	0.14	0.18	0.54	0.58	79	58
	青木	78	74	5.1	5.1	5.4	5.4	0.94	0.93	10.9	11.1	0.24	0.27	0.54	0.57	46	41
田中	南無谷	78	72	5.1	5.0	5.5	5.5	0.94	0.90	10.1	10.1	0.21	0.32	0.55	0.58	48	31
	暖地園研	78	77	5.1	5.1	5.6	5.5	0.91	0.93	12.2	11.0	0.21	0.33	0.53	0.58	58	34
	平均	78	74	5.1	5.1	5.5	5.5	0.93	0.92	11.1	10.8	0.22	0.31	0.54	0.57	51	35

果形指数：横径/縦径 糖度：屈折糖度計の測定値 酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値
 硬度：果実硬度計による測定値 糖酸比：糖度/酸度
 平均：3地区の平均、平年：1983～2008の平均(但し硬度は2000～2008の平均)

8月～10月の作業

8月下旬から9月一杯がせん定及び施肥の適期となる。9月中旬頃には花芽の確認ができるようになる。10月に入ると花芽の発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

せん定

8月下旬から9月中旬に行う。徒長枝あるいは混みすぎた枝を間引いて日光を樹冠内部に入れる。また上方に徒長した枝は切りつめて樹高を下げ低樹高化に努める。

施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実を図る。耕土の浅い園では10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施し、耕土の深い園ではそれぞれ11kg、9kg、7kgとやや少なめにする。

摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。摘らいは花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。開花期延長には、花房の長さが3～5cmの時に摘らいすることが最も有効である。

【生育情報の問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>